

男性保護司の保護観察体験記

担当した対象者Aは4年間くらいで終了するはずだった。それが令和の年になるまで関わるとは思ってもいなかった。

40代だった彼はパチンコや競輪等のギャンブルに嵌まり元手を稼ぐための窃盗を行い捕まっていた。仮出所後、私の住む地域に就職して会社の寮に入り担当することになる。思っていたより真面目に来訪し、都合が悪くなると忘れずに連絡をよこす人物だった。慣れるにつれ生い立ちや家族のことを話すようになった。妻と子供が2人いたが事件のことで離婚されてしまった、小さな街なので弟はそのことが原因で結婚出来なかった等、今の生活では心を開いて話をする人がいないので、何でも安心して話を聴いてもらえると喜んでいて。

そんな保護観察が2年過ぎた頃、突然姿を消して行方不明になりそこで保護観察は終わったのだが、数年後、窃盗で逮捕され刑務所に入っていると手紙が届く。両親は既に亡くなり弟とは絶縁状態で、頼れる友人もないので手紙を下さいとの便りが届く。何度かの手紙の中で、本を読みたいが金が無いので何の本でも良いから送って欲しいとのことで、少しでも更生に向かうきっかけになればと思い、読み終えた本を送り始める。

その後出所して生活保護を受けて生活していると連絡があったが、些細な事件を起こしては入所を繰り返すことになり、今は別の刑務所に。彼に対してどうすれば良かったのかとの反省と、何とか更生してほしいとの願いを込めて、本と便りを送り続けている。